

あとがき

日本Neurogastroenterology (神経消化器病) 学会が設立されて昨年で6年目を迎えた。三輪洋人 兵庫医科大学内科学(上部消化管科)教授の会長の下、祝祭日である文化の日(11月3日)に総会が大阪で開催されたが、150名もの多数の参加者があった。大阪を代表する梅田スカイビル36階の素晴らしい会場で、海外からの2名の著名な学者の招聘講演をはじめとして熱気の籠もった素晴らしい演題が次々と発表された。まさに、三輪学会長の機能性胃腸疾患解明への熱気がひしひしと伝わる見事な学会であった。まずは三輪会長をはじめとする三輪内科医局員一同に心から感謝の意を表したい。

年々、機能性消化管障害(FGID)患者が世界中で増加の一途を辿っている今日、臨床に携わる医師が本疾患の病態に理解を示し、患者・家族・社会の医療への信頼回復・推進に努力せねばなるまい。救急現場や産科、小児科などの医療崩壊が叫ばれている今日、患者サイドに立った医療に対する限界もささやかれている。しかし、画像診断や血液検査で異常が見つからないという理由で「正常」と診断されるが、胃腸症状を長期間繰り返し訴える患者が多数存在するのも事実である。若年者や働き盛りの人に多いが、昨今は高齢者にも増えている。原因不明といわれるので、いっそう不安感やストレスが強く、学校や職場・家庭内のトラブルと相まって、胃腸症状がますます悪くなる。体力・気力が低下して抑うつ反応が出現している人も多い。胃腸の異常が第二の脳といわれる腸管神経系や免疫・内分泌系を攪乱して、脳や全身に強い影響を与えるのである。

FGIDは、免疫系や腸管ペプチドの異常と絡み、複雑な病態を呈するとされるが、実態は未解明である。これまでわが国では、この種の疾病を異なる角度から研究する会が複数みられたが、来年より、病態をマクロ的に捉えるのを目的に、本学会と日本国際消化管運動研究会が合体した会議を開くことを前回の理事会で決定した。参加者の便宜を図り、疾病解明と有効な治療法の開発に前進することが期待される。最後に、今回もこれまでの学会proceedingsと同様に、学術定期冊子「消化管運動—目にみえない消化器疾患を追う」に掲載いただいた大日本住友製薬株式会社に、心から深甚なる感謝の意を表したい。

本誌編集主幹

日本Neurogastroenterology学会理事長 佐藤 信紘